

結婚相手の顔にこだわっている主人公が、顔のない騎士と心を通わせることで顔へのこだわりを捨てる

フェイス・トウ・フェイス

作・しき

登場人物

マリー（23）：村に住む娘。

顔なし騎士（25）：顔のない騎士。

赤騎士（25）：赤い服を着た騎士。

マリーとお見合いする予定。マリーの父母が選んだ。

友人1（20）：マリーの友人。

以下同じ。

友人2

友人3

マリーの父：（45）

マリーの母：（45）

騎士A：赤騎士の対戦相手。

村人1

村人2

村人3

○十六世紀風の森に囲まれた村の広場・昼

村祭りの日。

赤騎士（25）と騎士Aの決闘が行なわれている。二人とも兜をかぶっていて顔は見えない。

広場の前には観覧席が設けられており、マリーの母（45）と父（45）、その間にマリー（23）。その後ろに、友人三人（20）が決闘を見物している。

赤騎士、騎士Aを組み伏せて倒す。

騎士A「こ、降参！」

赤騎士、降参した騎士Aをしつこく殴り、審判に止められる。担架で運ばれていく騎士A。赤騎士、観覧席を見て兜をとり、得意満面でガッツポーズ。

マリー「あの人が、私のお見合い相手？」

マリーの父「そうだ。なかなかいい男だろう」

マリーの母「あなたにお似合いじゃない？」

マリー「げっ、勘弁してよ…あんな顔」

マリーの父と母、ため息をつく。

マリーの父「また顔か。もういい加減決められんのか？家柄も、お前には勿体無い話なのに」

マリーの母「器量の悪いあなたに、そうそう

縁談なんて来ないのよ？」

マリー「もう！わかってないんだから！私も理想ってものがあるの！」

マリーの父「もういい。とにかく明日は何が何でもお前を見合いに連れて行くからな！」
くすくす笑う友人達。

○村からほど近い森の中・夕方。

マリー、森の中の小道を、日傘と荷物を持って歩いている。その後ろを友人三人、キョロキョロしながら、恐る恐るついてくる。

マリー「もう、お父様だったらあんなに怒らなかつたっていいじゃない。こうなったら理想の相手は自分で探してやるんだから。」

友人1「マリー、家出なんかやめて家に帰りましょうよ」

友人2「早く戻らないと叱られちゃうわ」

友人3「この辺には凶暴な熊が出るってパパが…」

マリー「馬鹿ね。今更遅いわ。今戻ったら私達四時間のお説教よ」

友人達「そんなぁー」

突然、ガサガサと茂みから音がして、三メートルはある黒熊が飛び出してくる。

友人1「やっぱり出たー」

友人達、逃げ出す。

マリー、逃げ遅れて取り残される。

はじめは恐怖で震えるが、日傘を構えて熊を睨みつける。

マリー「まだ理想の人に出会えていないのにこんなところで死んでたまるもんですか！」

黒熊、マリーに襲いかかる。

マリー「ひっ、死ぬ…」

と、突然、兜をかぶった顔なし騎士(25)がマリーの前に躍り出る。顔なし騎士「お逃げください！ここは私が！」

マリー、木の陰へ。顔なし騎士、熊と戦ううち兜が脱げマリーの足もとへ転がる。

顔なし騎士、黒熊を追い払う。

マリー、兜を拾って顔なし騎士に近

づき丁寧にお辞儀。

マリー「私はマリー。命を助けていただいたいてありがとうございます。」

顔なし騎士「い、いえいえお礼などいりません。それではお元気で……」

顔なし騎士、背中をマリーに向けたまま、そそくさと去ろうとする。追いかけるマリー。

マリー「ちよつと待って！兜を忘れてるわ」
顔なし騎士「あっ、それはどうも」

マリー、振り返った顔を見て、絶叫。
腰を抜かす。

なんと、騎士の顔には、目も鼻も口も付いていない、のっぺらぼうだった。

そこへ、逃げ出した友人達が村人を連れて戻ってくる。

村人1「こつちから叫び声が聞こえたぞ」

村人2「あっ、マリー！」

村人3「あの騎士、顔がないぞ！化け物だ！」

顔なし騎士は村人によって村の納屋に捕らえられてしまう。

○村の納屋。夜明け前

顔なし騎士が納屋の中にうなだれて座る。兜と剣は取り上げられてしまった。

顔なし騎士「ああ、またダメだったか……」

(声)「あのう…昨日はごめんなさい。命の恩人をこんな目に合わせてしまった」

顔なし騎士「その声は、昨日のお嬢さんですか？」

マリー、そつと納屋の明かりとり用の小窓に近づく。

マリー「これを渡そうと思って」

大きな袋の中から兜と剣を取り出し、小窓から騎士に見せる。

マリー「それにこれもね。今出してあげるわ」
と、納屋の鍵を見せる。

○小さな橋が架かる小川のほとり・朝

土手に座る2人。

顔なし騎士の口の辺りに消えていくサウンドイッチを不思議そうに横目で見て
いるマリー。

マリー「ねえ、あなたは どうして顔が無いの？

『またダメだった』と 言っていたけど」

顔なし騎士、食べるのをやめたため息
をつく。

顔なし騎士「実は私、こうなる前はそこそこ

美男子で、もてたんです」

マリー「自分で言うのと 嫌味だわね」

顔なし騎士「でも、その頃の私は騎士道精神
からは程遠い、ひどい人間でした。ある時、
女性をひどく傷つけてしまいました、呪い
をかけられてしまったのです。」

マリー「呪いを解く方法はないの？」

顔なし騎士「謙虚で強く正しく、騎士道精神
が体に染み込むまでは元に戻らないそう
です。」

マリー「なるほど、それでやけに腰が低いの
ね」

顔なし騎士「それ以来、顔を隠して 剣の腕を
磨き、人助けをしているのですが、まだ元
に戻りません」

顔なし騎士、ため息。目の辺りに涙がにじむ。

顔なし騎士「こんな顔じゃ、故郷に帰れない
し、親に合わせる顔もない……」

マリー「笑えないわ、それ」

顔なし騎士「しかし、マリーさんは私を勝手に
逃して叱られませんか？」

マリー「いいのよ、どうせ昨日家出するはずだったし」

顔なし騎士「それはどうして？」

マリー「私ね、もういい歳だから両親が決められた相手とお見合いしてるんだけど、私のせいでいつもフイにしちゃうのよ。それで理想の相手は自分で探しに行こうと思ったわけ」

顔なし騎士「理想の相手ってどんな人なんですか？」

マリー「顔がかっこいい人よ。あなたはいいい人みたいだけど、肝心の顔がね…」

顔なし騎士「上から目線だなあ」

マリー「そうだわ」

マリー、何かを閃いたように袋から

化粧道具を取り出す。

マリー「これであなたの顔を描いてあげる」

× × ×

手鏡に映った下手くそな顔を見つめる

顔なし騎士。

顔なし騎士「これがマリーさんの理想の顔なんですか？」

マリー「そんなわけないでしょ！」

マリー、一瞬ムツとしてから、首をかしげる。

マリー「でもね、私の理想の顔を描こうって思ったのに、描いているうちにわからなくなってきたやつたの。もしかしたら理想の顔なんて、私の中に元々無かったのかもしれない…」

顔なし騎士「これでは私の元の顔にも程遠いですね…」

マリー「カッコよくしてあげられなくて、悪かったわね」

顔なし騎士、鏡を見て肩を震わせてい

る。

マリ―「あ、今笑ってるでしょ！分かってるんだから」

顔なし騎士、笑うのを止めるどころかさらに大笑いする。マリ―、つられて一緒に笑う。

突然、馬の蹄の音が。

(声)「やあ、マリ―さん。私のお見合いをすっぽかして、こんなところで何をしてるんですか。」

マリ―「あ、あなたは…」

赤騎士、馬から降りる。

顔なし騎士「お知り合いですか？」

マリ―「今日お見合いするはずだった相手よ」

顔なし騎士の顔を見て、鼻で笑う赤騎士。

赤騎士「あなたがおかしな騎士と駆け落ちしたと聞きましてね。どんなやつか見に来てみたんですよ」

マリ―「お見合いの件はごめんなさい…って、

駆け落ち、ですって？」

赤騎士「揃いも揃って私をコケにしやがって！」

赤騎士、剣を抜いて二人にからんでくる。逃げようとする二人。しかし赤騎士が行く手を遮る。

赤騎士「逃げるのか、臆病者！」

マリ―「誤解しないでよ、この人はなんの関係もないのよ」

とつさに顔なし騎士をかばおうとしたマリ―の頬を赤騎士の剣がかする。マリ―、流血。バランスを崩して土手から転がり落ちる。

顔なし騎士「あっ！マリ―さん！」

赤騎士「ふん、ドジな女だ！」

顔なし騎士「マリーさんもマリーさんですが
同じ騎士として、今のは捨て置けません！」

抜刀する顔なし騎士。決闘が始まった。
両者、剣を交えながらじりじりと橋の上へ。力で圧倒している赤騎士。顔なし騎士、赤騎士が力任せに切り掛かってきたところをいなして橋から突き落とす。

川に落ちた赤騎士、泥に腰まではまっ
て身動きできない。

顔なし騎士「大丈夫ですか？」

草まみれのマリーを土手の上に引っ張りあげ、傷の様子を見る顔なし騎士。

マリー「イタタタ：私は大丈夫、でもこれじやますますお嫁に行けないわね」

マリー、顔なし騎士の顔をじつと見る。
マリー「あれ、顔が：」

マリー、ハンカチで騎士の顔を拭く。
へたくそな顔が消え、本来の顔が現れる。美男子と言うほどではない。

マリー「あなたの顔だわ！」

顔なし騎士「本当だ！：どうです？マリーさん、僕の顔」

マリー「うーん、理想とは違う：」

顔なし騎士「やっぱり」

マリー「：けど、私は好きだわ」

道の上で顔を見合わせて笑うふたり。
村の方から村人や友人たちの呼ぶ声。
二人、村に向かって歩き出す。

○タイトル「フェイス・トゥ・フェイス」

○エンドロール